書評

県史美術篇を読んで

小田秀夫

まだ見ぬものに寄せる期待をもって受け取ったとき、まず、ずっしりとした手応えに期待感を一段と膨らませるものがあった。同時に執筆者の方々、並びに編さん班各位のご労苦の程を肌で感じた。そして部厚いこの本を早く開いて見たいという衝動にかられたものだった。

パラパラッとめくってみて感じたことは、予期していたよりグラビヤのカラー写真が少いのが目についた。そこですぐ我が大分県史は美術篇といえども、見る読み物ではなく、見ながら読む歴史書だなという感を強くした。しかし、中味はほとんど毎頁ごとに、写真か図か図表などが入っており、目を休ませながら割と楽な気持で読んでいけそうだなという感じがした。

この四月末か五月頃であったか、いつものように中世以降は念入りに通読していったが、もう記憶も薄れ、読後の感じや感銘も定かでない。一門外漢が、感想など申し述べるのは、いささか気後れの思いである。

率直に感じたことは、まず、編年で書かれているのが何よりの魅力であった。次に時代が現在に近づくにつれ興味も増して来、記述中、随処に馴染みの地名や既知の人名などが出てくると、関心は一層深まり、これで明治以降は読み方に加速度がついた感じであった。それに、到る処にフリ仮名が付されていて、これが読むとき、妙に正確に知り得たという安心感を伴うものである。

しかし平安時代でも富貴寺の建物、磨崖仏、石塔類や、鎌倉時代の刀剣、国東塔、建築物、江戸時代の書画や石橋、あるい

は明治以降の絵画、彫刻、書道などの各界の概観の中に現存の人について触れた箇所もあって、思わず読み入り、時の経つのを忘れさせたのも、時間に制約のない浪々の身のせいのみではなかったように思えた。

また各時代の各節の冒頭に、大てい掲げてある「はじめに」は必ず読むようにした。これで節の項目の大要を摑むことができ、しかる後に目あての細目に進むと、この関連で更に興味と理解とを深められ、有難かった。

よく「歴史は人によって造られ、人は歴史によって造られる」といわれている。歴史書を読むと事実、人と歴史とは確かに相互に関連し合って生きており各時代を織りなし、因果関係を産み、次代へ尾を曳いて時間と共に変化しながら、次代へ次代へと流れているように思われる。そして後世、歴史的事象は、さまざまな促え方をすることができる。例えば、ある事柄を上層の支配体制の流れの中の事象とみることもできれば、別な観点から庶民の心の底流のほとばしりとみることも可能であろう。

この歴史の書き方にも二通りあると思う。つまり事象を重点に書くか、事象の背景となっている人物を主眼に書くかである。一般にいって、矢張り人物を中心とした事象を記述する方が興味を惹くものと思われる。しかも歴史に興味を持つ人の多くは歴史の推論の進め方や歴史観よりは、庶民の側に立った見方で書かれた歴史の中に埋もれた逸話や挿話というものの面白さにより興味を示すのではなかろうか。勿論、歴史学者や専門的立場の方々を除いた、ごく一般市井の歴史愛好家についての集約的傾向であるが。

このように片寄らない歴史を書くことは、むづかしいと言われている。美術史においても、この弊とは全く無縁にあるとは、いい切れないのではなかろうか。

しかし、この美術篇を見る限り、県史として今後、他県に如何なる豪華なものができようとも内容、体裁とも少しの遜色もない、我が大分県史として特色のある出来栄えであると、問われれば胸を張って答えたい。終りに執筆者の方々をはじめ、本書の編さんに当られた方々に深く敬意を表したい。

（[redacted]）